

日本森林学会・日本木材学会共同企画 男女共同参画ランチョンミーティング

“研究者家族の様々なカタチ”を終えて

男女共同参画委員会

本文

2013年3月27日、日本森林学会と日本木材学会との共同企画により、“研究者家族の様々なカタチ”をテーマとしたシンポジウムを、岩手大学・学生センターA棟G22にて開催いたしました。これは、日本森林学会・男女共同参画担当と日本木材学会・男女共同参画委員会の主催により、岩手大学での両学会大会開催期間中に男女共同参画ランチョンミーティングとして行ったものです。今回は、岩手大学、森林科学研究所に所属するそれぞれの研究者としてのお立場から、研究者とその家族の生活、それらをサポートする新たなシステムについてご紹介いただきました。



写真1 学会大会期間中のランチタイムでしたが、スケジュールの合間を縫って年齢、性別、立場も多彩な50名近くの参加がありました。

講演会は、日本森林学会男女共同参画理事 太田祐子氏が司会進行として進められました。一つ目の講演は、岩手大学農学部の松木佐和子氏と岩手大学男女共同参画推進室の山下梓氏から、「仕事・生活、二者択一にならないための秘策とは？～「両住まい手当」を施行して2年～」と題するものでした。前半は、松木佐和子氏により、研究者家族の様々な選択について、日本とフィンランドにおけるそれぞれの研究者の実際の生活の様子と共に紹介されました。そして後半は、山下梓氏により、それぞれの研究者の生活の中で、パートナーとの別居の際に生じる問題解決のひとつの方法として、岩手大学の「両住まい手当」についての紹介と現状報告がなされました。

前半の松木佐和子氏の講演では、フィンランドにおけるポスドク研究者らが学位取得後、

同じく研究者であるパートナーと共にどのような生活設計と選択を行っているかについて、豊富な写真と共に具体的な事例が紹介されました。また、フィンランド国内における女性の社会進出の歴史にも触れ、1917年の国家完全独立の後、様々な政策と社会制度の整備の努力によって、現状では、国会議員の女性比率が40%近いこと、前期大統領は女性であったという成功事例が示されました。しかしながら、その一方で、大学教員の構成のうち講師以下は50%であるのに対し、教授職は20%であることなど、依然としてある課題についても言及されました。

後半の山下梓氏の講演では、対する日本の女性研究者の選択の事例として、岩手大学の女性研究者の生活スタイルが紹介されました。そして、これらの女性研究者の多くが、パートナーとは別居（単身赴任等）であることが、大学内のアンケート結果と共に示されました。そこで、岩手大学におけるこれらの課題解決として3年前に新設された、就業上の理由で日常的に配偶者や



写真2 会場には、子どもを連れた男性研究者の姿もありました

パートナーと住まいを別に（2か所居住）せざるを得ない女性研究者に対して、優れた女性研究者の大学への定着を促すという目的で行われている、「両住まい手当」制度による支援について、その必要性和利用状況などが紹介されました。この「両住まい手当」制度は、国立大学法人岩手大学職員給与規制に基づき、やむを得ない事情により配偶者と別居している岩手大学女性教員に対する岩手大学独自の経済的支援制度で、制度発足後3年目の2012年においては7名の女性教員に対するの支給実績があるそうです。これまで、女性研究者が、配偶者の勤務地などの都合により自身の勤務継続を断念し、離職する場合があったこと、給料の大半が毎月の新幹線代になっていたこと、といった問題点の解消には一役かっているこの制度ですが、この“手当”を女性研究者に限定することの是非が、現状そして今後の課題となっているようです。

続いて二つ目の講演は、森林総合研究所 男女共同参画室 古澤仁美氏から、「森林総合研究所における「研究者家族の様々なカタチ」」と題して、森林総合研究所でのモデル

事業や、意識調査の結果の紹介とともに、具体的な事例として、それぞれの家族構成を含む研究者の生活についての話題が提供されました。その中で、男性研究者の育児休暇取得の事例について示されるとともに、積極的に育児に取り組む男性研究者の層が広がっていることから、ワーク・ライフ・バランスは、“女性”限定の問題ではなく、“男女“そして”みんな“の問題として捉えたい、という男性側からの説得力のある意見も紹介されました。

これらの講演に引き続いて、ディスカッションが行われ、日本木材学会理事 中山榮子氏をディスカッション・コーディネーターとして進められました。会場の参加者は、大学教授、研究所主任研究員、そして若手教員、大学院生、小さな子供とその父親、ベビーーカーの赤ちゃんと若いカップル、といった立場も性別も年齢も多彩なメンバー四十数名で、それぞれの立場から率直な意見交換が行われました。例えば、事実婚を選択した上での子育て、女性研究者の就職と異動に伴って男性パートナーが離職し子供と同伴したこと、結婚した後も同居期間が極めて短いことなど、それぞれのご経験からのお言葉には真に迫るものがありました。会場の参加者それぞれのご経験やお考え、思いを述べていただくにはあまりにも短い、学会大会会期中のランチョンミーティングという限られた一時間ではありましたが、研究者家族には様々なカタチがあることを再認識し、お互いの在り方を尊重しあう貴重な交流の場となったのではないかと考えております。

この“研究者家族の様々なカタチ”をテーマとしたランチョンミーティングは、研究と



写真3 話題提供して下さった先生方とディスカッションコーディネーターの中山榮子本学会理事



写真4 ディスカッションの最後に、男性側の意見を聞かせてください、という会場からの要望に応える岩田忠久本会委員。

生活の両立を考える上で、それぞれの経験談を元に情報・意見交換を行うという、これまでの木材学会の学会活動としては行われてこなかった取り組みでしたが、関係者や参加者の方々からのご好評をいただくことができました。また、このランチョンミーティングは、日本森林学会と日本木材学会それぞれの男女共同参画による初めての共同企画としても開催され、会場には、日本森林学会、日本木材学会、そして岩手大学、森林総合研究所での男女共同参画に関連する様々な取り組みについての紹介ポスター掲示も行われました。この企画開催をひとつのきっかけとして、森林科学研究の関係者と木質科学研究の関係者に様々な学術交流が生まれること、そして、それぞれの研究者にとって公私ともに豊かな研究生活の育みにつながれば、大変嬉しく存じます。

最後になりましたが、シンポジウム開催にあたり、岩手大学・男女共同参画推進室、森林科学研究所・男女共同参画室の共催、ならびに男女共同参画学協会連絡会の後援を頂きました。関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。



写真5 会場では、それぞれの男女共同参画の取り組みについてのポスター掲示も行いました。



写真6 当日の報告資料と共に、学会や大学での男女共同参画に関するそれぞれの活動について紹介するリーフレットの配布も行いました